

デキゴト名詞句内における属格照合のメカニズム: ロシア語・ドイツ語からの検証*

宮内 拓也

人間文化研究機構 国立国語研究所
東京外国語大学大学院 総合国際学研究所
t-miyauchi@ninjal.ac.jp

伊藤 克将

東京大学大学院 総合文化研究科
日本学術振興会 特別研究員 DC
k_ito@phiz.c.u-tokyo.ac.jp

1 はじめに

ロシア語やドイツ語において、他動詞と同語根のデキゴト名詞に後置される属格名詞が受け取る意味役割に関しては、デキゴト名詞の種類によって制限がある。具体的には、(1)のように属格名詞が動作主のみを受け取ることができるデキゴト名詞¹(タイプ1), (2)のように属格名詞が動作主・被動作主いずれも受け取ることができるデキゴト名詞²(タイプ2), (3)のように被動作主のみを受け取ることができるデキゴト名詞³(タイプ3)が存在する⁴。

- (1) a. *udar* { *mužčiny* / * *stola* } (ロシア語)
hit man-GEN table-GEN
b. *der Schlag* { *des Mannes* / * *des Tisches* } (ドイツ語)
the hit the man-GEN the table-GEN
「{ 男が / テーブルを } たたくこと」
- (2) a. *poseščenie* { *Ivana* / *goroda* } (ロシア語)
visit Ivan-GEN city-GEN
「{ イヴァンが / 町を } 訪れること」
b. *die Befragung* { *der Journalisten* / *des Angeklagten* } (ドイツ語)
the interview the journalists-GEN the accused-GEN
「{ ジャーナリストが / 被告人に } 質問すること」
- (3) a. *razrušenie* { * *vraga* / *goroda* } (ロシア語)
destruction enemy-GEN city-GEN

*本研究は JSPS 科研費(課題番号: 25284083, 研究代表者: 浅原正幸; 課題番号: 16J08572, 研究代表者: 伊藤克将)の助成を受けている。

¹ ロシア語では, *poceluj*「キスすること」, *izmena*「裏切ること」, *tanec*「踊ること」, *šjopot*「ささやくこと」など。ドイツ語では, *Tritt*「蹴ること」, *Kuss*「キスすること」, *Schwenk*「振ること」, *Grunz*「つぶやくこと」, *Zupf*「引くこと」など。

² ロシア語では, *prodaža*「売ること」, *predatel'stvo*「裏切ること」, *pinok*「蹴ること」など。ドイツ語では, *Beschuss*「射撃すること」, *Vertrieb*「販売すること」, *Besuch*「訪れること」, *Belagerung*「攻囲すること」など。

³ ロシア語では, *postroenie*「建てること」, *okruženie*「包囲すること」, *sbiti*「撃墜すること」, *zapolučenie*「得ること」など。ドイツ語では, *Erbauung*「建てること」, *Verrat*「(秘密などを)漏らすこと」, *Abschuss*「撃墜すること」, *Erwerb*「獲得すること」, *Fang*「捕獲すること」, *Raub*「盗むこと」, *Kauf*「買うこと」など。

⁴ 本稿におけるタイプ1・2・3はGrimshaw(1990)によるresult nominals, simple event nominals, complex event nominalsの分類とは異なり、後置される名詞句が受け取る意味役割という1つの観点でより単純に分類している。

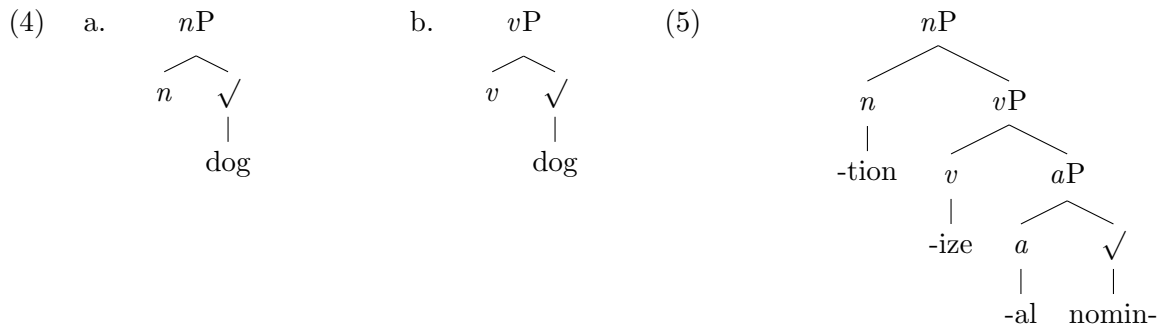
- b. die Zerstörung { * des Feindes / der Stadt } (ドイツ語)
 the destruction the_enemy-GEN the_city-GEN
 「{ 敵が / 町を } 破壊すること」

従来, こういった現象はデキゴト名詞の項構造にその原因が求められ (Rapp 2006, Pazelskaya 2007 など), あくまで語彙の問題として扱われることが多かった. 本稿の目的は, この現象を統語論の問題として, 格付与およびフェイズに関する理論を用いた分析を行うことで, この現象に対しより原理立った説明を与えることである. なお, 本稿はあくまでこの現象を統語論的にとらえることに主眼を置くため, 各タイプにそれぞれ共通して観察される意味特徴については深くは立ち入らない⁵.

2 本稿における枠組み

2.1 分散形態論

本稿ではデキゴト名詞の構造の分析にあたり, 分散形態論 (Distributed morphology; DM) の枠組みを採用する. DM では, 語彙項目はルートとしてレキシコンに登録されており, n や v といった機能範疇によってカテゴリーが決定すると考えられている. また, これらの機能範疇は音形を持つ場合もある. 名詞化や動詞化の接辞はこういった機能範疇の主要部を占め, \checkmark が主要部移動によってこれらの機能範疇へと移動することにより, 形態が実現する. 例えば, 名詞の *dog* は (4a), 動詞の *dog* は (4b) の構造を持つ. また, *nominalization* は (5) で形成される.



2.2 フェイズ理論

本稿では, Chomsky (2000) によるフェイズ不可侵条件 (6) を採用する.

(6) フェイズ不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition; PIC)

In phase α with head H , the domain of H is not accessible to operations outside α , only H and its edge are accessible to such operations. (Chomsky 2000: 108)

Chomsky (2000, 2008) は, CP および vP はフェイズであると述べているが, それ以外の範疇もフェイズである可能性が他の研究で指摘されている. 本稿では, nP がフェイズであるという提案 (Carstens 2001, Arad 2003, Hicks 2009 など) を採用し, 分析を行う⁶.

⁵ アスペクトの観点から言えば, タイプ 1 には活動動詞として使われることが多い動詞と同語根のものが多く, タイプ 2・3 には達成動詞として主に使われる動詞と同語根のものが多く. さらにタイプ 2 では事象の開始時と終了時で被動作主の性質が変化していない一方, タイプ 3 では被動作主が状態変化を被っていることが多い. しかしながら, いずれも例外が存在し, 各タイプのデキゴト名詞の意味特徴の一般化についてはさらなる検討が必要である.

⁶ Carstens (2001) は項構造を根拠に nP をフェイズだと考えている. さらに, Arad (2003) は形態論におけるアクセシビリティの点から, Hicks (2009) は束縛関係を捉える上で, それぞれ nP をフェイズだとしている.

2.3 Phase-Sliding

Gallego (2010) は、スペイン語などにおける疑問文の語順や左方領域の振る舞い、VOS 語順の導出などの分析にあたり、フェイズが v^* P から TP へと変更される Phase-Sliding を提案した。これは動詞が v^* から T へと主要部移動する際に、フェイズ性 (phasehood) も v^* から T へと移動するというものである。Phase-Sliding の実装にあたり、Gallego (2010) では、まず Pesetsky and Torrego (2001) に基づき、主要部移動は narrow syntax における操作であると仮定されている。さらに、Chomsky (2008) のラベル付けアルゴリズム (7) を採用した上で、 v^* -T 移動の結果、T のラベルがハイブリッドラベルである v^*/T となり、これを主要部にもつ v^*/TP がフェイズとして機能するとしている (8)⁷。

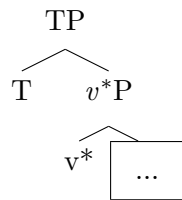
(7) ラベル付けアルゴリズム (Labeling Algorithm; LA)

a. In $\{H, \alpha\}$, H an LI, H is the label

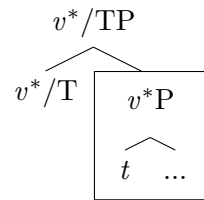
b. If α is internally merged to β , forming $\{\alpha, \beta\}$ then the label of β is the label of $\{\alpha, \beta\}$

(Chomsky 2008: 145)

(8) a.



b.



Gallego (2010) の理論は、narrow syntax において主要部移動が起きた際、ある主要部のフェイズ性も共に移動することを予測する。Harley (2009a: 141) は、 n への主要部移動が素性駆動である可能性を示唆しており、この考え方に基づけば、デキゴト名詞形成の際の主要部移動は narrow syntax で行われていることになる⁸。すると、デキゴト名詞形成の際、フェイズである句の主要部が移動した場合は Phase-Sliding が起こることになる。以下 3 ではこの Phase-Sliding により、デキゴト名詞句内における属格の照合可能性が正確に予測されることを示す。

3 分析

本節では 2 で述べた枠組みに基づき、デキゴト名詞句内における属格照合のメカニズムを提案する。まず、DM の枠組みを採用した上で、Harley (2009b) に基づき、 \sqrt{P} 主要部が項に被動作主を取るとする。そして属格目的語を取ることができないタイプ 1 の名詞の構造として、(9) を想定する。(9) では、 \sqrt{P} に n が併合されたがゆえに、句が名詞として解釈される。 nP 指定部には、動作主または所有者の θ 役割を持つ名詞句が位置する (Kayne 1994, Carstens 2000, 2001, Adger 2003 など)。さらに nP には、属格照合に関する素性をもつ機能範疇 X が併合されると仮定する⁹。 \sqrt{P} 補部の Patient の属格が照合されるためには、探査子 (probe) の X が Patient を目標子 (goal) として一致 (Agree) が行われる必要があるが、フェイズである nP がこの一致を阻害する。ゆえに、タイプ 1 の名詞では属格をもつ被動作主が現れることができないのである。

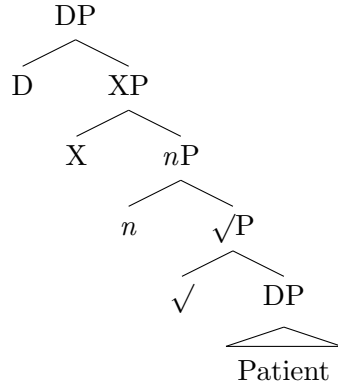
それでは、タイプ 2・3 において被動作主の属格が認可されることはどのように説明されるのだろうか。ここで、タイプ 2・3 の統語構造として (10) を想定する。

⁷ 枠線はフェイズにおける補部領域 (complement domain) を示す。以降も同様である。

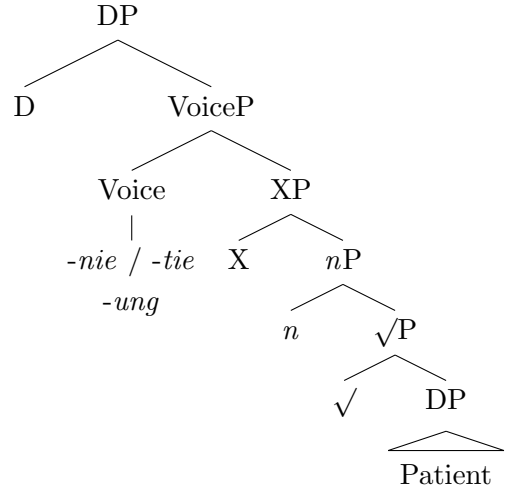
⁸ ただし Harley (2009a) で扱われているのはデキゴト名詞ではなく、名詞への名詞編入である (truck-driver など)。デキゴト名詞形成の際の主要部移動も narrow syntax で起きていることの証左については、今後の課題である。

⁹ この XP は、Carstens (2001) において名詞の単数複数を司る機能範疇 NumP に対応する。Carstens (2001) は、スワヒリ語のデータより、DP と nP の間に存在する機能範疇 NumP の主要部が、主名詞に対して所有者等となる名詞句の格を照合することを示している。

(9) タイプ1の統語構造



(10) タイプ2・3の統語構造



(10) では (9) と異なり, XP の上位に VoiceP が想定されている¹⁰. この構造の違いはタイプ1に名詞化接辞 (ロシア語: *-nie / -tie*, ドイツ語: *-ung*) を伴うものが存在しないことから支持される¹¹. この議論における前提は, 名詞化接辞が VoiceP 主要部を占めるということだが, これはロシア語において, (11-12) のように名詞化接辞が受動分詞の形態素を含む (Babby 1997 など) ことから支持される.

- (11) a. *razrušit'* – *razrušen* – *razrušenie*
 destroy-INF destroy-PASS.PTCP destruction-NOM.SG

- b. *napisat'* – *napisan* – *napisanie*
 write-INF write-PASS.PTCP writing-NOM.SG

- (12) a. *zakryt'* – *zakryt* – *zakrytie*
 close-INF close-PASS.PTCP closing-NOM.SG

- b. *vzjat'* – *vzjat* – *vzjatie*
 take-INF take-PASS.PTCP taking-NOM.SG

(11-12) で示すように, *-n-* / *-t-* の分布が受動分詞と派生名詞で一致している. これはすなわち, 受動文において投射される VoiceP と同種の機能範疇を, 名詞化接辞が投射することを示唆している.

(10) における √P 主要部は, デキゴト名詞の形態を形成するために, VoiceP 主要部まで移動する. このとき, 主要部移動制約 (Travis 1984, Matushansky 2006 など)¹² により, √ は *n* および *X* を経由して Voice まで移動する. その際, Phase-Sliding により, *nP* ではなく VoiceP がフェイズとなることで, XP 主要部と √P 補部の DP が一致することが可能になるため, 被動作主が属格を持つことが許される (13).

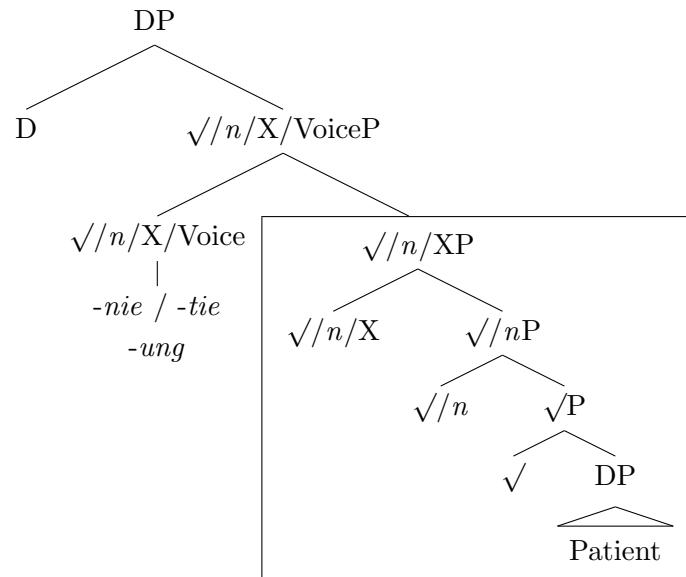
¹⁰ VoiceP に関しては Kratzer (1996), Bruening (2013) を参照のこと.

¹¹ 脚注 1 を参照のこと.

¹² なお, Matushansky (2006: 74) は主要部移動制約を以下のように示している.

(i) Head movement may not skip intermediate heads.

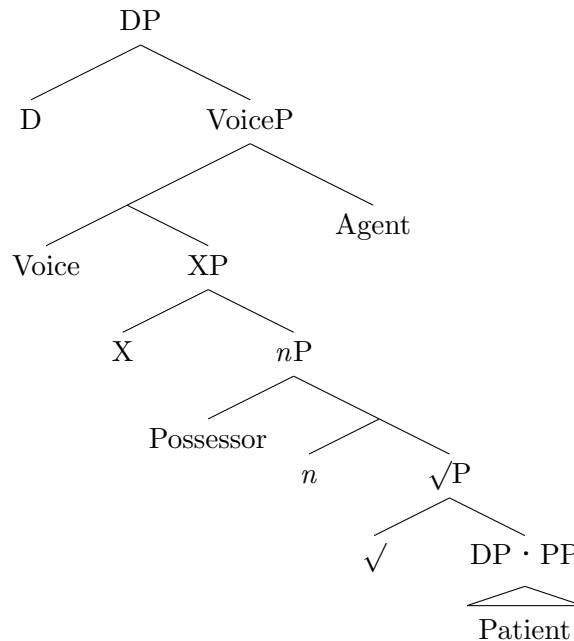
(13)



それでは、タイプ1・2においては属格動作主が認可される一方、タイプ3において動作主が属格をもてないのは、どのように説明されるだろうか。ここでまず、動作主が名詞句内のどの位置に存在するか考える。前述のとおり、動作主や所有者が存在する位置は *nP* 指定部であることが先行研究で指摘されているが、(14) のような例を適切に捉えるためには、(15) のような構造が妥当である。

(14) America's destruction of the city by the bomb

(15)



(14) のような例において、*America* 「アメリカ」は所有者、*the city* 「その町」は被動作主、*the bomb* 「爆弾」は動作主として解釈されるが、それぞれ (15) の Possessor, Patient, Agent の位置で θ 役割を受け取っていると考え、Possessor は DP 指定部へ移動する (Fukui and Speas 1986 など) とすれば、正しい語順が導出できる¹³。主題役割付与の一様性仮説 (UTAH; Baker 1988)¹⁴ を採用し、(15) の構造を想

¹³ VoiceP 指定部の Agent が右側に位置することは、Bruening (2013) に従っている。

¹⁴ 主題役割付与の一様性仮説とは以下の通りである。

- (ii) Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-structure. (Baker 1988: 46)

定すると、タイプ1・2における動作主¹⁵は実際には *nP* 指定部で Possessor としての θ 役割を受け取っており、XP の探査子に *c* 統御されているため属格の照合が可能になっていると考えることができる。一方、タイプ3で属格動作主が認可されないのは、VoiceP 指定部に動作主が位置しており、XP 探査子に *c* 統御されていないがゆえに、一致を行うことが出来ないためであると考えられる¹⁶。

4 おわりに：まとめと今後の課題

以上本稿では、デキゴト名詞句内における属格名詞が受け取ることのできる意味役割を説明できるような属格照合のメカニズムを提案した。本稿では属格をもつ言語として、スラブ語派からロシア語、ゲルマン語派からドイツ語を取り上げたが、他の言語においても今回提案したメカニズムが成り立つかどうかについては今後の課題である。例えば日本語においても、タイプ1-3に対応すると思われるデキゴト名詞が存在するが¹⁷、日本語には今回扱った名詞化接辞に対応するものが存在しないため、今回提案したメカニズムが適用できるかどうかは自明ではない。また、デキゴト名詞句内ではないが、ノ格名詞は「温泉の街」、「医者の人」、「衝撃の事実」など、他にも様々な意味役割を受け取ることが可能である。今後はより広範に、かつ精密に記述をした上で、より説明力のある理論構築をすることが必要となる。

引用文献

- Adger, David. 2003. *Core syntax: A minimalist approach*. Oxford: Oxford University Press.
- Arad, Maya. 2003. Locality constraints on the interpretation of roots: The case of Hebrew denominal verbs. *Natural Language and Linguistic Theory* 21:737–778.
- Babby, Leonard H. 1997. Nominalization, passivization, and causativization. *Die Welt der Slaven* 42:201–251.
- Baker, Mark C. 1988. *Incorporation: A theory of grammatical function changing*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Bruening, Benjamin. 2013. By phrases in passives and nominals. *Syntax* 16:1–41.
- Carstens, Vicki. 2000. Concord in minimalist theory. *Linguistic Inquiry* 31:319–355.
- Carstens, Vicki. 2001. Multiple agreement and case deletion: Against ϕ -incompleteness. *Syntax* 3:147–163.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries. In *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2008. On phases. In *Foundational issues in linguistic theory: Essays in honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria L. Zubizarreta, 133–166. Cambridge, MA: MIT Press.
- Fukui, Naoki, and Margaret Speas. 1986. Specifiers and projection. *MIT Working Papers in Linguistics* 8:128–172.
- Gallego, Ángel J. 2010. *Phase theory*. Amsterdam: John Benjamins.
- Grimshaw, Jane. 1990. *Argument structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Harley, Heidi. 2009a. Compounding in distributed morphology. In *Oxford handbook of compounding*, ed. Rochelle Lieber and Pavol Stekauer, 129–144. Oxford: Oxford University Press.
- Harley, Heidi. 2009b. The morphology of nominalizations and the syntax of *vP*. In *Quantification, definiteness, and nominalization*, ed. Anastasia Giannakidou and Monika Rathert, 320–342. Oxford: Oxford University Press.
- Hicks, Glyn. 2009. *The derivation of anaphoric relations*. Amsterdam: John Benjamins.
- Kayne, Richard S. 1994. *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kratzer, Angelika. 1996. Severing the external argument from its verb. In *Phrase structure and the lexicon*, ed. Johan Rooryck and Laurie Zaring, 109–137. Dordrecht: Kluwer.
- Matushansky, Ora. 2006. Head movement in linguistic theory. *Linguistic Inquiry* 37:69–109.
- Pazelskaya, Anna. 2007. Argument structure in Russian deverbal nouns in *-nie*. In *Studies in formal Slavic linguistics*, ed. Franc Maršič and Rok Zeucner, 255–272. Nova Gorica: Peter Lang.
- Pesetsky, David, and Esther Torrego. 2001. T-to-C movement: Causes and consequences. In *Ken Hale: A life in language*, ed. Michael J. Kenstowicz, 355–426. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rapp, Irene. 2006. Was den Besuch zum Ereignis macht – eine outputorientierte Analyse für die Verb-Nomen-Konversion im Deutschen. *Linguistische Berichte* 208:407–437.
- Travis, Lisa. 1984. Parameters and effects of word order variation. Doctoral Dissertation, MIT.

¹⁵ (1) で見た通り、タイプ1における動作主は属格で実現することが可能である。このとき、 \sqrt{P} 主要部は XP 主要部で発音されているが、これは素性駆動による移動ではなく PF 効果 (PF effect; Chomsky 2000) であるため、Phase-Sliding が起きていないと考えることができる。 \sqrt{P} 主要部を誘因 (attract) する素性は VoiceP 主要部が持つとすると、VoiceP を持たないタイプ1では素性駆動による $\sqrt{}$ の移動が不可能となるため、タイプ1における $\sqrt{}$ の移動を PF 効果と考えることは的外れではないであろう。

¹⁶ しかしながら、この論はあくまで推測の域を出ないためないため、タイプ3における動作主の位置が統語的に高いことを示す他の経験的な証拠が必要であるが、この点は今後の課題である。

¹⁷ タイプ1は「{ 達人の / *機の } 打撃」など、タイプ2は「{ 記者の / 首相の } インタビュー」など、タイプ3は「{ *敵の / 街の } 破壊」(ただし、「敵」は動作主解釈) などである。